

北京日本学研究中心

通

讯

《 第 38 号 》

责任编辑：清水展 吴咏梅

邮政编码：100081 Tel：8424893 1994.6.9

简 讯

- ◇ 5月10日上午8:30~12:30：“中心”在电教3举行了研究生10期生口试复试，由竹田晃主任教授、李书成代理主任、小野正弘副教授、野中俊彦教授任主考，共有包括一名保送生在内的22位初试合格者参加了复试。
- ◇ 5月13日：原“中心”主任李德、代理主任李书成、副主任陈海良均因年龄关系光荣离任了。他们都是“中心”的元老，为“中心”的正常运行和发展作出了很大的贡献，在此对他们表示崇高的敬意和衷心的感谢。而原日语系主任一大名鼎鼎的严安生教授和年轻有为的徐一平副教授将继任“中心”主任和副主任，他们表示要和“中心”的教职工一起同心协力，创造一个融洽有活力的工作环境，在继承前人成果的基础上，把“中心”办得更好、更充实、更有前景。
- ◇ 5月19日~21日：第六届日本学中日学术研讨会隆重召开。除了来自全国各地的47名代表外，还有国家教委、中日21世纪委员会、对外友协、日本驻华大使馆、日本国际交流基金北京事务所、新闻机构等的来宾，北京外国语大学的有关人员以及“中心”的专家、学生共263人参加了研讨会。
- ◇ 6月4日“中心”组织了16名专家及家属去天津蓟县盘山风景区游览。三个小时的路程后到达目的地，大家兴致勃勃地分乘当地农民的带棚机动三轮车上山。大家在山顶的舍利塔上，边俯瞰四周美景边进午餐。在参观完天成寺后于傍晚回到北京。
- ◇ 第9期日语助教进修班的29位同学将于6月23日~7月22日去日本作为期一个月的研修实地考察，他们将在各地参观访问，并在日本的普通家庭里体会其生活情趣之后回国。国家教委办公厅副主任郭振有、外事司亚非处副处长白钢、日研中心的宁民治、李宝顺老师将同行。
- ◇ 本学期每周一下午2:00~4:30，社会研究会在二层师生活动室举办活动，由社会专业的老师和社会研究室成员发表近期学术研究的论文，研究生们则就自己要撰写的论文进行发表。研究会上大家都充分地表达自己的见解和意见，气氛活跃。这个活动不仅给社会学研究者提供了学习、交流的场所，增进了相互了解，也起到了指导学生论文的积极作用。欢迎感兴趣的同仁参加。

李 德

有这么一个俗语叫做“糊涂虫只懂一件事”。

真正的友谊、和睦来自相互间的真正的理解，而真正的理解源于相互间的正确认识。个人间的关系如此，集体间的关系也是如此。

我们每个人都是纵横时空交叉点上的存在。不管愿意与否都得在这个现实交叉点上生存下去。

和平的竞争、协调、共存是这个时代所要求的。那么活在这个世上、回答这个时代的要求，就成了我们的基本课题。因此，我们有必要正确认识和把握相互间的纵的关系及横的关系，并在此基础上加深相互间的理解。如果不是这样，那么真正的友谊和亲善就无法想象，即使有，也是为一时一时的时势所左右，不能持续长久的。

这次，在大家的关怀下终于能没有大的过错，离开了现任职位。在职期间无论是公务还是私事都受到大家很大的关照，也得到了许多的教益。在此表示深深的谢意。

沉舟侧畔千帆过 病树前头万木春

★ “中心”的美好回忆 ★

李 书 成

在“中心”工作四年，虽然比较紧张繁忙，但心情很愉快并留下了许多美好的回忆。起初并不是一切都是那么顺利的，由于国情、文化的差异，曾经遇到不少困难，有时甚至感到困惑。不过，即使是那时，我们双方也都相信这些困难终究是可以克服的，因为我们都有办好“中心”的愿望和责任感。这种坚定的信念使我们产生了动力和耐心。之后，我们双方常常在一起开诚不公地交换意见，渐渐我们之间有了理解，并增进了友谊，工作也出现了生机。

中国有句老话叫“精诚所至，金石为开”。过去我们靠着精诚合作加深了理解，打开了“金石”，克服困难并完成了中日双方交给的任务，希望这个经历对以后工作多少会有所借鉴。

“中心”是一块希望的沃土，我衷心地期待撒在这儿的种子和已经栽上的幼苗，日益茁壮成长并早日开花结果，以奉献于中日共同事业和我国现代化建设。

“中心”是我的梦。我衷心地祝愿“中心”如旭日东升，蒸蒸日上，繁荣发展。

◎ 匆匆到任的三言两语 ◎

严 安 生

在迎接日研中心十周年和实施第三个五年计划的关键时期，到“中心”来工作，深感

责任重大。”中心”成立以来，为了中国的日本学研究和日语教育事业，在培养人材、倡导学风、促进科研、活跃学术交流等方面所取得的成绩，是有目共睹的。尤其令人欣慰的是，经过中日双方前后十多年的共同努力，“中心”首倡其名的「日本学」作为一门新的学科，已为国内学界所公认；“中心”培养的学生，作为新一代、跨世纪的日本研究者，声势已颇为可观。只要我们敢于正视已往的不足，善于调动已有的成果、人材资源，我相信是能够在新的五年事业计划期间，把日研中心办得更好的。即：在内容上，真正是中国的日本学（或称日本学的中国学派）的；在体制上，真正是开放的——面向国内、面向国际、面向二十一世纪——的教育、研究、学术交流、图书资料的“中心”。

★ 就 任 致 辞 ★

徐 一平

从全国日语教师培训班（大平班）到北京日本学研究中心，前后已经走过了十四年的历程。如果按照人的年龄来比喻，“大平班”的五年也许相当于人的幼年时期，日本学研究中心这九年就相当于人的青少年时期了。

我是“大平班”的第二期学员，在“大平班”的一年学习，给我留下了很深的印象，正是从那以后，我才又有机会留学日本，读完了博士课程，打下了一点点学习、研究的基础。今天，当这一项中日合作的事业迈向第十五个年头，北京日本学研究中心将迎来十周年这一具有重大纪念意义的时刻，我又回到这一事业中，并充当继续完成这一事业的普通一员，我感到非常的光荣和庆幸。纵观中国的日本学界，近些年成长起来的有成就的中青年学者，几乎每一个人都是这一项中日合作事业培养造就出来的人材。每当我看到这一事实时，我都对每一位为此项事业做出过贡献的中日方领导、专家、教授、工作人员表示由衷的感谢。

我相信，在中日双方的精诚合作下，此项合作事业一定会越来越发展，一定会为中国的日本学界培养出更多更好的优秀人材，为中国的日本研究和日本的中国研究开拓更深更广阔的领域。我也愿尽全力为发展此项合作事业作出自己微薄的贡献。

第六届日本学中日学术研讨会

研讨会委员长 熊谷 圭知

5月18日至21日，由北京日本学研究中心主办的第六届日本学中日学术研讨会隆重召开了。本中心在国家教委、国际交流基金、日本驻华使馆的支援下，每年都举办这样的研讨会，为中国全国各地的日本学研究者欢聚一堂，发表研究成果、互相交流提供了极为宝贵的场所。

这次，作为新的尝试，我们在特别讲演中设了两个专题，每个专题请日中方特邀代表各一名进行演讲。研讨会本来的宗旨是围绕某个双方共同的专题进行讨论，为了多少能实现这个目标，我们才这样构思设置的。开幕式后，即以〈从电影看日本文化〉为题，由中

国世界电影协会副会长陈笃忱先生和日本著名电影评论家佐藤忠男先生分别进行讲演。陈先生因为已是高龄，又是用不熟练的日语讲的，所以和听众的交流显得稍微欠缺些。但由于他长期致力于日本电影的研究，故其演讲的内容可谓是极其详尽且丰富的。佐藤先生则就陈先生所提到的沟口健二、小津安二郎、黑泽明等几位日本的代表性电影界巨匠，对他们的艺术风格作了介绍，阐述了这几位大师虽然风格迥异但各自都不同地继承了日本文化的传统的见解。接着，他又以中国观众也很喜爱的日本电影《男人真苦——寅次郎的故事》为例，用轻松幽默的语言论述了电影所反映的日本人的恋爱观，听得全场听众如痴如迷。

最后一天的讲演是以女性问题为题，由人民大学的沙莲香教授和文京女子大学的山下泰子教授分别就中国和日本女性的现状问题进行报告。沙教授指出，近年来中国的经济变化给女性带来的影响，在农村和城市以及学历、年龄各异的女性之间是不同的。而山下教授则通过放映她自己监制的录象带，从国际化的角度论述了日本女性及其地位的变化。有意思的是，在讨论中我们发现她们两人对家庭中女性的角色分工问题的看法不一。很遗憾由于时间不够，讨论没能深入进行下去，但是对充满发现和激励的演讲内容，听众的反应是相当热烈的。

语言、文学、社会、文化的四个分科会共有47位代表参加，会上也进行了热烈的发言讨论。特别是听说语言分科会的讨论水平很高。代表中有很多是“中心”毕业生，我们可以看到他们活跃的身姿。这次研讨会为了配合演讲主题，还安排组织了放映电影、参观电影制片厂的活动，受到大多数与会人员的好评。

明年将迎来“中心”成立十周年纪念。要确立“中心”——名符其实的中国日本学研究的中心的地位，还有许多课题、工作要做。我真诚地希望，研讨会中凝聚起来的教职员工和学生们的能量、产生的欢欣鼓舞，将成为攻克这些难关的巨大力量。

助教班一年来的回顾

饭野 清士

光阴似箭，第九期助教班的课程已近尾声。已经安然无恙地完成结业小论文写作及提交任务的助教班学生们，在这期《通讯》发行之际，大概已经考完期末考试了吧？现在只等着访日研修了。你们或是与丈夫（妻子）、或是与幼小的孩子、未婚夫（妻）相离别，寄宿于学生宿舍，听着走廊里的敲盆声，度过了十个月的读书生活，至此的忍耐总算要得到回报了。四个星期的时间虽然短暂，希望你们在日本过得愉快。你们已完全具备了这种资格，这个我完全可以证明，因为自九月份以来我就一直和助教班的同学在一起。回国以后，希望你们把在日本的所见所思、以及在中心所学到的知识应用到原单位的工作中去。最后，我想说：在中心的一年对我来说是非常有意义的时光，能和大家在一起生活学习真是感到幸福。谢谢。

センター通信

(第38号)

1994. 6. 9

< ニュース >

◇5月10日：午前8：30～12：30の間、センターLL教室3にて第10期生の口頭試問が行われた。竹田晃主任教授、李書成先生、小野正弘先生および野中俊彦先生が審査を担当した。推薦生1名を含む22名の一次試験合格者が受験した。

◇5月13日：センター前主任の李徳先生、主任代行の李書成先生、副主任の陳海良先生が定年を迎えられ、栄えある退任をなされた。この3人の先生方はセンターの元老で、本センターの運営と発展のために多大な貢献をなされた。この小報を借りて、ここで衷心からの敬意と感謝の意を表したい。後任として本大学日本語学部主任で著名な嚴安生先生が主任に、前途洋々たる少壮学者の徐一平先生が副主任に就任された。両先生はセンターのスタッフと協力し、良好な人間関係と活気のある研究教育環境を作ってゆくことによって、センターの一層の拡充と発展を図るとの決意を示された。

◇5月19日～21日：第6回日本学中日シンポジウムが盛大に開催された。中国全土の各地から参加した47名の代表のほか、国家教育委員会、中日21世紀委員会、対外友好協会、日本在北京大使館、国際交流基金北京事務所、報道機関からの来賓、北京外国語大学の関係者、そしてセンターの専家の先生方、学生など合わせて263名がこのシンポジウムに参加した。

6月4日：センターの16名の専家および家族は、天津の薊県にある盤山への観光に出かけた。3時間ほどで目的地に達し、地元農家のオート3輪が引く幌付き台車に分乗して山頂まで登り、頂上舍利塔で周囲の景観を一望しながら昼食を取った。天成寺に寄った後、夕刻に北京に戻った。◇

◇日本語研修コース第9期生の29名は、6月23日から7月22日までの1ヶ月間、日本への訪問研修を行います。全国各地への訪問、見学、ホームステイなどを経験する予定です。国家教育委員会から事務庁副主任の郭振有氏（団長）と外務部アジア・アフリカ部門副処長の白鋼氏、北京日本学研究中心から寧民治氏と李宝順氏が同行します。

◇今学期の毎週月曜日、午後2：00～4：30に、二階の師生活動室で社会研究会が開かれています。院生、研修生、若手研究者などの論文構想の発表や研究報告に対して、活発な質疑応答と議論が行われています。社会科学の研究を志す者たちにとって、交流と研鑽の場となっています。興味のある方は、気軽にご参加下さい。

職を去るに当たって

李 徳

「バカの一つ覚え」という言葉がある。

真の友誼、和睦は相互間の真の理解から生まれる。真の理解は相互間の正しい認識から生まれる。これは個人間の関係においても、また集団間の関係においても同じことである。

私たちは、いつも縦の時間的な、横の空間的な交差点に存在するものである。つまり、

好むと好まざるとにかかわらず、この現時点を生きてゆかねばならない。

時代は平和な競争、協調、共存を求めている。この世に生きて、この時代の要求に応じてゆくことは、私たちの基本的な責務である。したがって、相互間の縦の関係と横の関係を正しく認識し把握し、この基盤の上に立って、相互理解を深めてゆく必要がある。さもなければ、真の友情も親睦も考えられず、あってもその時々の時勢に揺さぶられて、持続することができない。

このたび、お陰様で大過なく職を去ることになりました。在任中は大変お世話になり、もろもろのご教示をいただきました。ここで厚くお礼申し上げます。

沈舟側畔千帆過 病樹前頭万木春

センターの思い出

李 書成

センターで仕事をしていた4年間は、忙しかったとはいえ、愉快で実に楽しかったです。たくさん美しい思い出を残してくれました。

最初の頃は、かならずしも全てが順調というわけではありませんでした。国柄や文化の差異から生ずる困難がありました。時には困惑を覚えることもありました。けれども、そういう時でも、これらの困難は最終的には必ず克服することができると、中日双方の皆が信じていました。センターを円滑に運営してゆきたいとの願いと責任感を、双方が持っていたからです。そのような揺るぎない信念から、我々の活力と忍耐力が生まれてきました。時間の経過とともに、中日双方は、さらに一緒になって心を開き、率直な意見を交換するようになりました。それにつれて、お互いの相互理解と情誼が一層深まり、仕事にも活気が出てきました。

中国には「精誠所至金石為開」という諺があります。「至誠は岩をも貫き通す」という意味です。今まで我々は、真心と誠実をもって互いに協力しあい、理解を深めて「金石」を開き、困難を克服し、中日双方に与えられた責務を果たしてきました。このような経験が、今後の仕事に多少なりとも役に立つことを希望しております。

センターは非常に将来性のある所だと思います。ここに蒔いた種、植えた苗が、日ごとに逞しく成長し、一日も早く花を咲かせ、実を結び、中日共同事業および我が国の現代化のために貢献することを心から願っています。

センターは、私の夢でした。センターが、東に朝日の昇るごとく、日一日と向上、発展し、繁栄してゆくよう祈念しております。

着任早々の二言三言

巖 安生

日本学研究所センターの成立10周年と、さらには第三次5カ年計画が実施される直前の時期に赴任してきたことについて、私は責任の重さを痛感しています。設立以来センターは、中国の日本学研究所と日本語教育事業のための人材を育成し、学風を唱導し、研究を促進し、学術交流を活発にするという面において、顕著な成果を挙げてきました。とりわけ我々にとって喜ばしいことは、中日双方の10年におよぶ努力の結果、センターが最初に

提唱した「日本学」という新しい学問領域が、既に国内外の学界で公認されてきていることです。センターが育成してきた学生たちが新しい世代を形成し、21世紀に向けた研究者として無視できない一大勢力となっています。

以前の至らざる点を直視し、既に得た成果と人材を活用しさえすれば、新しい5カ年計画の間に、日本学研究センターをさらに良いものとすることができると確信しています。すなわち、内容の面においては中国的日本学（あるいは日本学の中国学派）となり、制度の面においては、一国内外に向け、21世紀に向け一真に開放的な教育、研究、学術交流、さらには図書資料のセンターとなるということです。

着任の挨拶

徐 一平

全国日本語教師研修班（大平学校）から北京日本学研究センターまで、前後あわせて既に14年の道のりを歩いてきました。人の年齢でたとえてみれば、「大平学校」の5年間は人間の幼年期に当たり、日本学研究センターの9年間は青少年期に相当するでしょう。

私は「大平学校」の二期生でした。「大平学校」で勉強した1年間は、私に非常に強い印象を残しました。また、その経験があったからこそ、私には二度目の日本留学のチャンスが訪れたのでした。それで博士課程を修了することができ、これからの勉強や研究の基礎を築くことができました。この中日合作事業は今年で15年目に入り、しかも今年是北京日本学研究センターが設立10周年を迎える記念すべき年に当たっています。この記念すべき重要な時期に再びここに帰って来て、引き続きこの事業を完成するための一員となれたことを光栄に思っています。

中国の日本学研究の分野を見渡すと、近年に顕著な業績を挙げている若手・中堅研究者のほとんどが、この合作事業で養成した人材です。この事実を見るたびに、事業に貢献して下さった中日双方の指導者、専門家、教授、スタッフの方々に衷心より感謝したいと思います。

中日双方の誠心誠意の協力のもとで、この事業は必ずや益々の発展をとげ、もっと多くの秀れた日本学研究の人材を養成することができ、中国の日本研究や日本の中国研究のためにもっと深くもっと広い領域を開拓してゆくことができると信じております。微力ながら私も全力をあげて、この合作事業を発展させるための貢献をしてゆく所存であります。

第6回日本学中日シンポジウム

熊谷 圭知

5月18日から21日まで、北京日本学研究センターが主催する、第6回日本学中日シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、本センターが、国家教育委員会、国際交流基金、駐中国日本大使館の後援を得て、毎年開催しているものであり、中国全土の日本学研究者が集い、研究発表・交流をする貴重な場となっている。

今回は、新しい試みとして特別講演に2つのテーマを設け、それぞれのテーマについて日中各1名の講演者に報告して頂くことにした。これは、シンポジウムが本来もつ、共通テーマをめぐる討論の場という趣旨を少しでも実現したいとの意図からである。

開幕式直後には、「映画に見る日本文化」をテーマに、中国世界電映協会副会長の陳篤忱氏と、日本の著名な映画評論家である佐藤忠男氏に、ご講演頂いた。陳氏はご高齢の上、不慣れな日本語でのご講演のため、聴衆とのコミュニケーションが思うにまかせなかったと察するが、講演内容は氏の日本映画への長年の研究をふまえた、詳細かつ重厚なものであった。佐藤氏は、陳氏の講演を受け、氏が取り上げた、溝口健二・小津安二郎・黒沢明という日本を代表する巨匠たちが、その作風を異にしながらも、それぞれに日本文化の伝統を受け継いでいるという見解を披露した後、中国でも人気のある「男はつらいよ」を通じて見た日本人の恋愛観を軽妙な語り口で論じ、満場の聴衆を魅了した。

最終日の講演は、女性問題をテーマとし、人民大学の沙蓮香教授と、文京女子大学の山下泰子教授に、それぞれ中国と日本の女性の現状を語って頂いた。沙教授は、近年の中国の経済変化が、農村と都市、また学歴や年齢を異にする女性の間、異なる影響を与えていることを指摘した。一方、山下教授は、ご自身が監修したビデオも用いながら、国際化という視点から日本女性の地位とその変化を論じた。お二人の議論には、家族内の女性の役割の捉え方などに相違が見られたのも興味深かった。討議を深める時間が不足したことは残念だったが、発見と刺激に満ちた内容に、聴衆の反応も熱のこもったものであった。

言語・文学・社会・文化の4つの分科会には、合計47名の一般代表が参加し、こちらも大変熱心な報告と討議が繰り広げられた。特に、言語分科会の議論は大変レベルの高いものであったと聞く。代表の中には、センターの卒業生の姿も多くみられ、その活躍ぶりがうかがえた。今回のシンポジウムでは、講演テーマに合わせ、映画上映や撮影所見学などの企画も設けたが、これも参加の方々にはおおむね好評であった。

来年はセンターも創立十周年を迎える。センターが文字通り中国の日本学研究の中心としての地位を確立していくためには、まだまだ多くの課題が残されている。シンポジウムに結集された教職員・学生たちのエネルギーとそこで生まれた刺激が、そうした課題を乗り越えていく力に結びつくことを願わずにいられない。

研修コースの1年を振り返って

飯野 清士

はやいもので研修コースの第9期の日程もそろそろ終わりに近づいてきました。修了小論文の作成・提出という大仕事を無事やりとげた研修生のみなさんも、この「通迅」が発行される頃には期末試験をほぼ終えていることでしょう。あとは訪日研修を待つのみです。夫や妻、まだ幼い子供あるいはまた婚約者と別れ、学生宿舎に寝泊まりし、廊下に響く食器の音を気にしながら授業を聞いた10か月の生活、これまでの忍耐がようやく報われようとしています。4週間という短い期間ではありますが、日本での研修をおおいに楽しんできてください。研修生のみなさんにはそうする資格が十分すぎるくらいあることを、9月からご一緒した私が証言したいと思います。帰国後は、日本で見たこと考えたこと、センターで学んだことを本務校でのお仕事に役立ててください。最後に、センターでのこの1年は私にとっても有意義な1年でした。みなさんとともに過ごし学ぶことができて幸せでした。謝謝。